「ペトロの手紙　一」　2026 年 01 月 09 日

イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、滞在している選ばれた人たち、すなわち、父なる神が予知されたことに従って、霊により聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血の注ぎを受けるために選ばれた人たちへ。恵みと平和が、あなたがたに豊かに与えられますように。（Ｉペトロ１：1～2）

Ｉペトロは、冒頭に「イエス・キリストの使徒ペトロから」と、著者はペトロであると書いているが、ペトロの名を借りた「偽名文書」と言われる書簡である。ペトロは、暴君ネロ皇帝の治世、紀元 64 年頃、「逆さ十字架」で殉教したと伝えられている。古代教会において、ペトロは最も尊敬を集めた使徒であった。著者は、ペトロの名を借り、ペトロの権威のもとに、本書を認めたのである。信仰の捉え方はイエス・キリストの十字架と復活を中心としたパウロの信仰に追従している。パウロの影響を受けたパウロ主義者が書いたものと考えられる。また、ローマを「バビロン」(5:13) と書いているが、ローマをバビロンと言うようになったのは、70 年以降である。本書が書かれたのは 90 年代、キリスト教徒が迫害を受けていた時代を背景にしている。1 世紀末に、ドミティアヌス皇帝によって、キリスト教徒に対する組織的な迫害があった。その組織的迫害の時代であると推測する人もいるが、その確証はない。異教徒からの一般的、日常的な迫害があった時代ではないか。

紀元 30 年代のはじめ、聖霊降臨によって最初のエルサレム教会は誕生した。これ以降、エルサレムがローマ軍に陥落した 70 年までは、イエス信者はキリスト教徒とは呼ばれず、ユダヤ教イエス派と受け取られていた。パウロの宣教もユダヤ教イエス派であった。アンティオキアでキリスト者と呼ばれるようになったが、その名が定着したのは、70 年を過ぎた頃からである。ローマ帝国の皇帝を「主」と仰ぐ政治体制の中で、イエスを「主」と信じる新興宗教のキリスト教徒たちは周りからの誤解と偏見に晒され、迫害を受けた。著者は、異教徒たちから様々な迫害を受けているキリスト教徒たちに苦難に耐え、固い信仰に立つようにと、この書簡を書いた。そして、異教徒からの迫害を受けることはキリストの苦しみに与ることで、そこに、キリストの栄光が現れる確かな救いがあると、信仰を全うするように勧めている。宛先は、「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、滞在している選ばれた人たち」となっている。このように、地名を明記していることは珍しい。これらの地方は、小アジア（現トルコ）のローマ帝国の属州である。当時、ユダヤ教の指導者は世界に離散しているユダヤ教徒たちに、ユダヤ教信仰にしっかり留まるように書簡を送っていた。教会もこれに倣い、小アジアに離散しているキリスト者たちを慰め、信仰を励ますために、書簡を書き送ったのである。著者は、宛先の人々のことを、「父なる神が予知されたことに従って、霊により聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血の注ぎを受けるために選ばれた人たち」と言っている。小アジアの各地に離散して滞在し、迫害に苦しんでいる人々である。この人たちは、神の御計画に基づいて、聖霊によって聖なる者とされ、キリストの血の注ぎを受けるために選ばれたキリストに従う人々であった。著者は、孤立し、不安と恐怖のなかにあるキリスト教徒に愛と信頼を込めて、キリスト信仰を全うするように力づけている。挨拶の終わりは例によって「恵みと平和が、あなたがたに豊かに与えられるように」という祝福の祈りである。